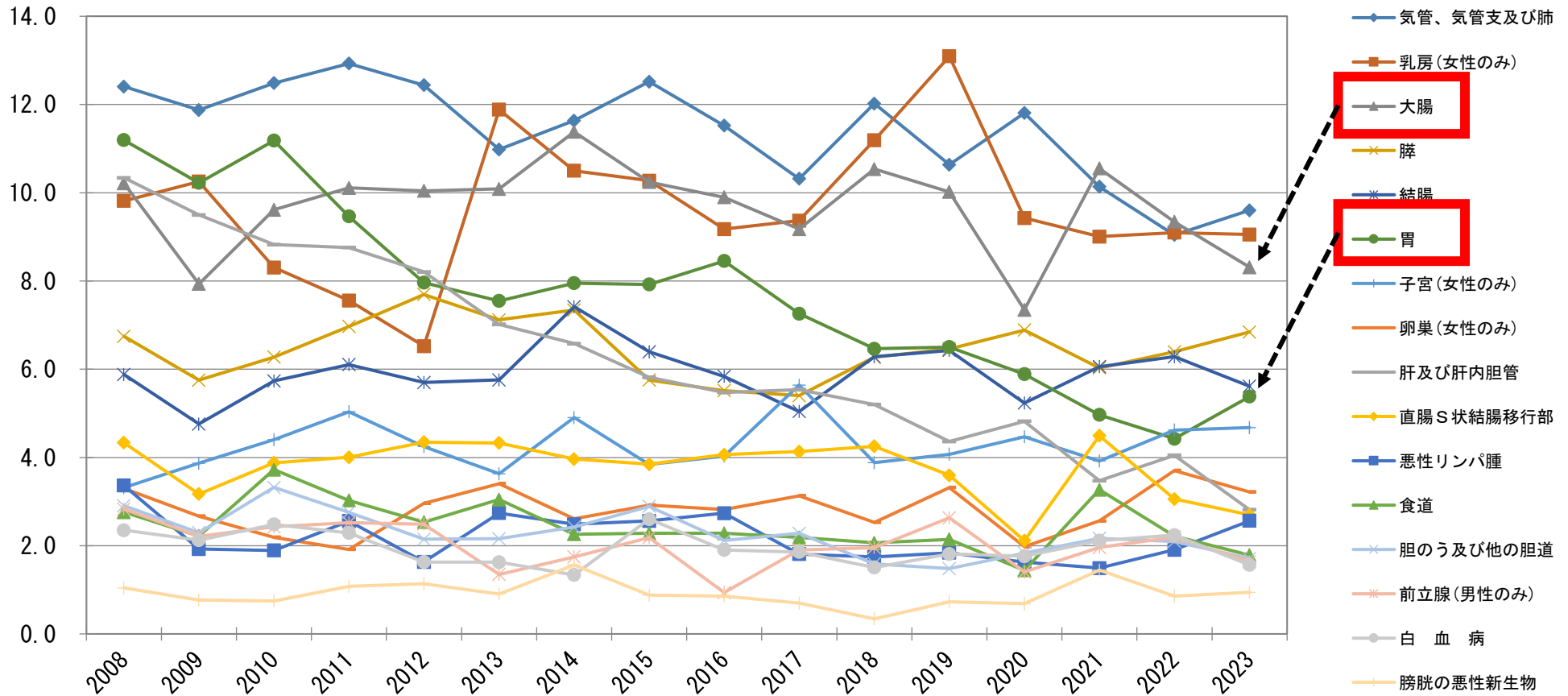


各がんの登録状況からみた 評価のまとめ

※令和6年度は、全国がん登録において2021（令和3）年の罹患者に関するデータが確定される年ですが、全国がん登録システムの障害により確定作業が遅れており、2020（令和2）年のデータが最新となります。

部位別 75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）

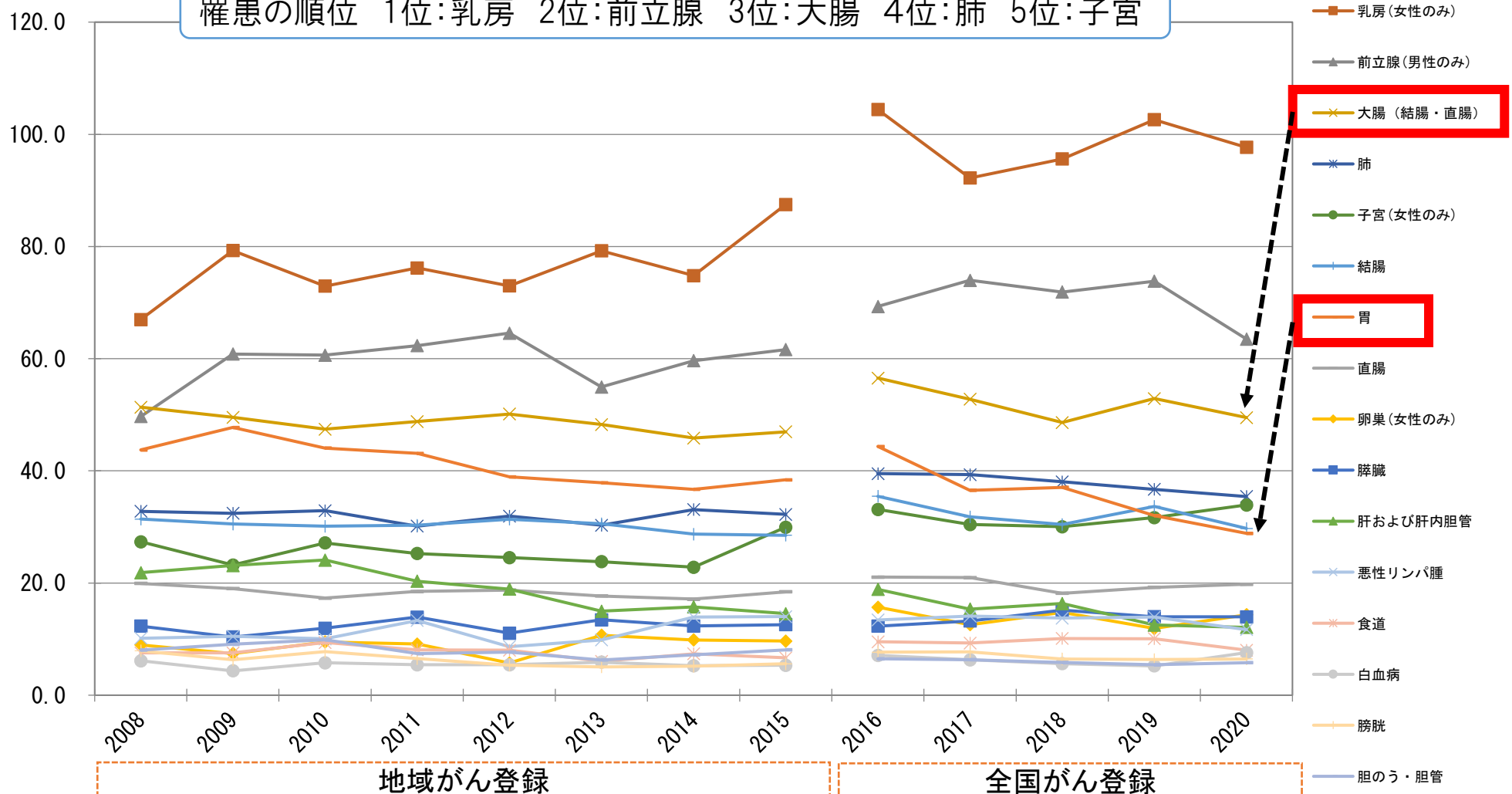


出典：国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」（人口動態統計）

大腸がんによる死亡率は、長期的にみると横ばいで推移しており、上位1～3位にある胃がんによる死亡率は、大きく減少しており、2008年と比較すると、概ね半減している

部位別年齢調整罹患率(人口10万対)(上皮内がんを除く)

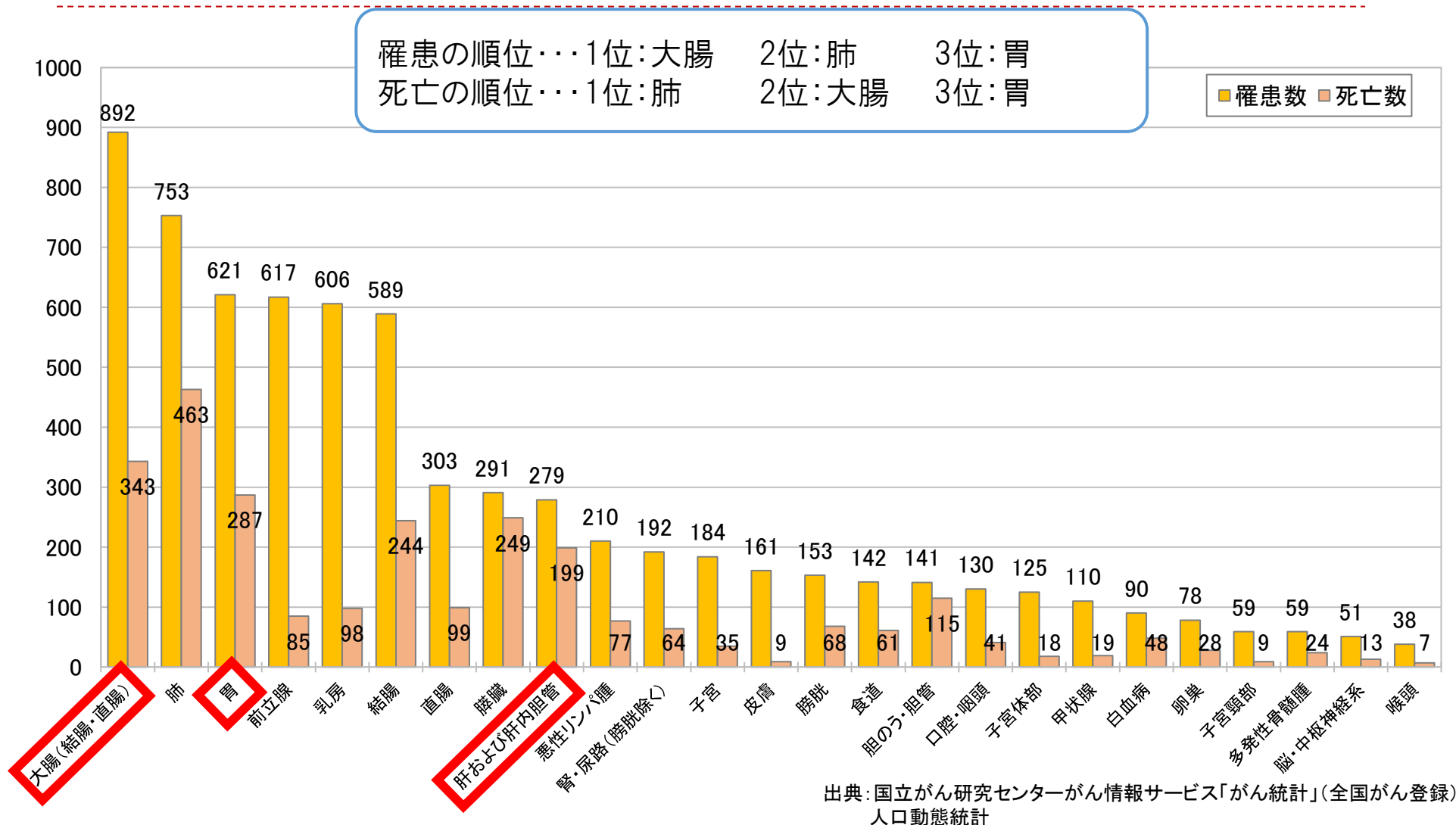
罹患の順位 1位:乳房 2位:前立腺 3位:大腸 4位:肺 5位:子宮



出典: 国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん罹患モニタリング集計(MCIJ))
国立がん研究センターがん情報サービス「がん統計」(全国がん登録)

大腸がんの罹患率は横ばいで推移しており、乳がん、前立腺がんにつき3位にある
胃がんの罹患率は減少しており、近年では肺がんや子宮がんの罹患率より低くなっている。

山梨県の罹患数と死亡数の比較(2020年)



がんにかかった人の数(罹患数)は、大腸がんが最も多く、肺がん、胃がんが続いている。がんにより亡くなった人の数(死亡数)については、肺がんが最も多く、大腸がん、胃がんの順になっている。乳がんや前立腺がんのように罹患数に比べて死亡数が少なく、死亡原因になりにくいがんがある一方で、肝がんやすい臓がん、胆のうがんなど、罹患数と死亡数の差が小さいがんもあるということもわかる。

胃がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に全国を下回っており、2013年から2023年の10年間で28%減少している。
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が78.3%で他のがんに比べて高い。
3. 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。

大腸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に横ばいで推移している。
2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が64.5%で、胃がんや乳がんの80%近い値と比べて低い。
3. 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。

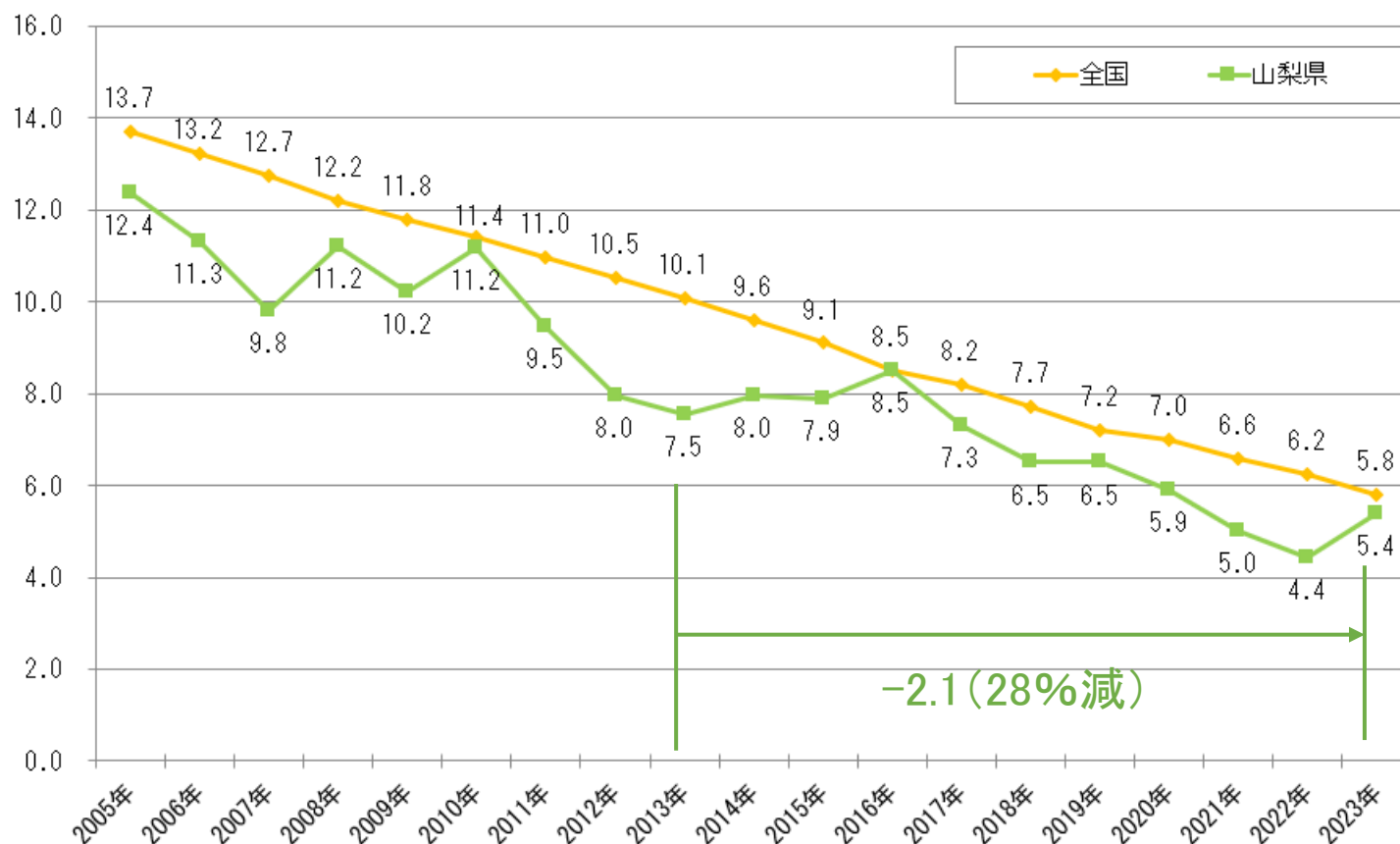
肝がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約60%減少し、2021年に初めて全国を下回った。
2. 発見経緯(2016～2020)は、他疾患の経過観察中が51.6%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は9.2%で最も低い。
3. 胃がんや大腸がんに比べ、進行度(2016～2020)は限局が60.3%で高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%と低い。

胃がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的に全国を下回っており、2013年から2023年の10年間で28%減少している。(参考資料1スライド35)

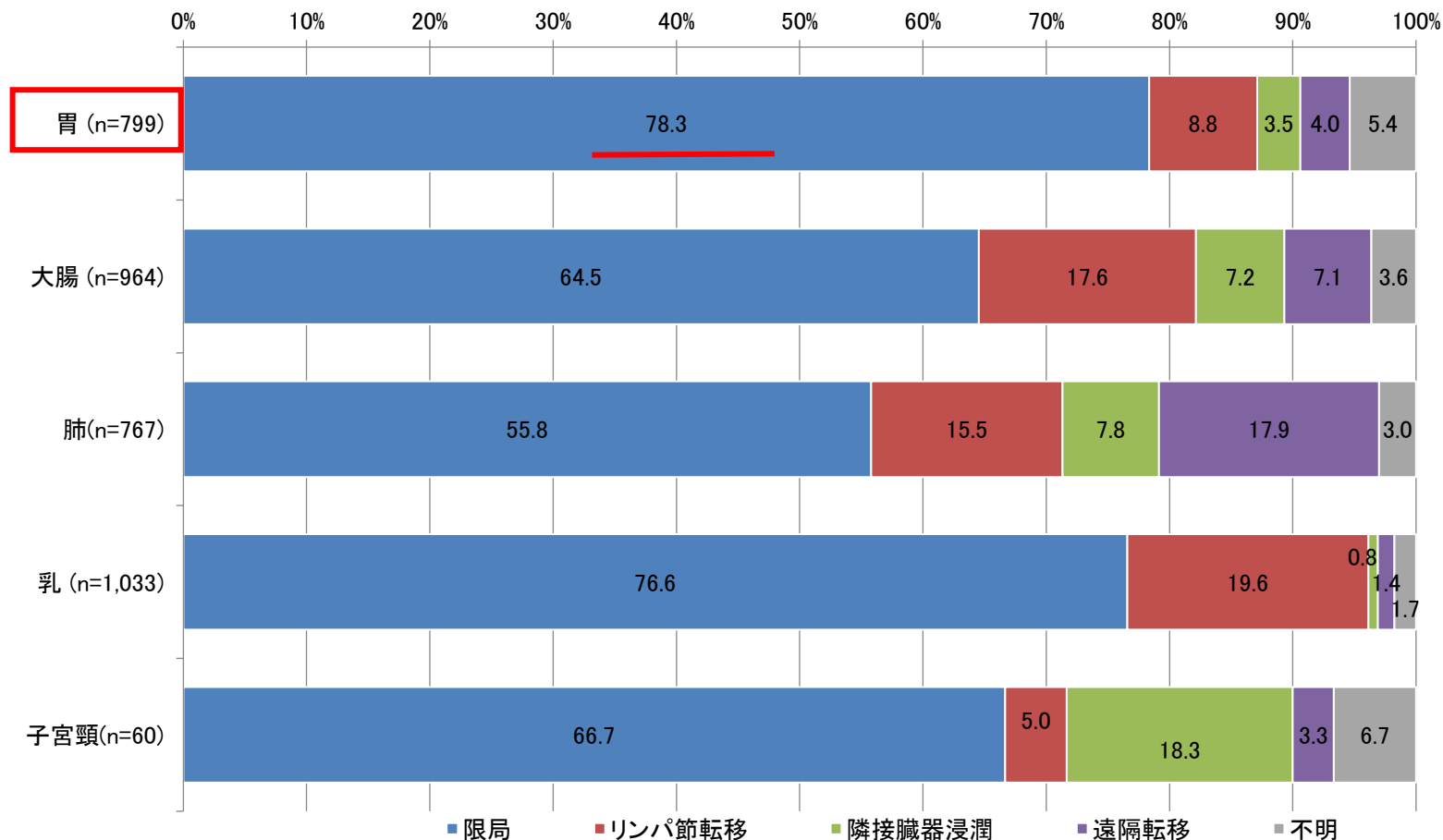
胃がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



胃がん

2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が78.3%で他のがん比べて高い。
(参考資料1スライド32, 42, 52, 71, 86)

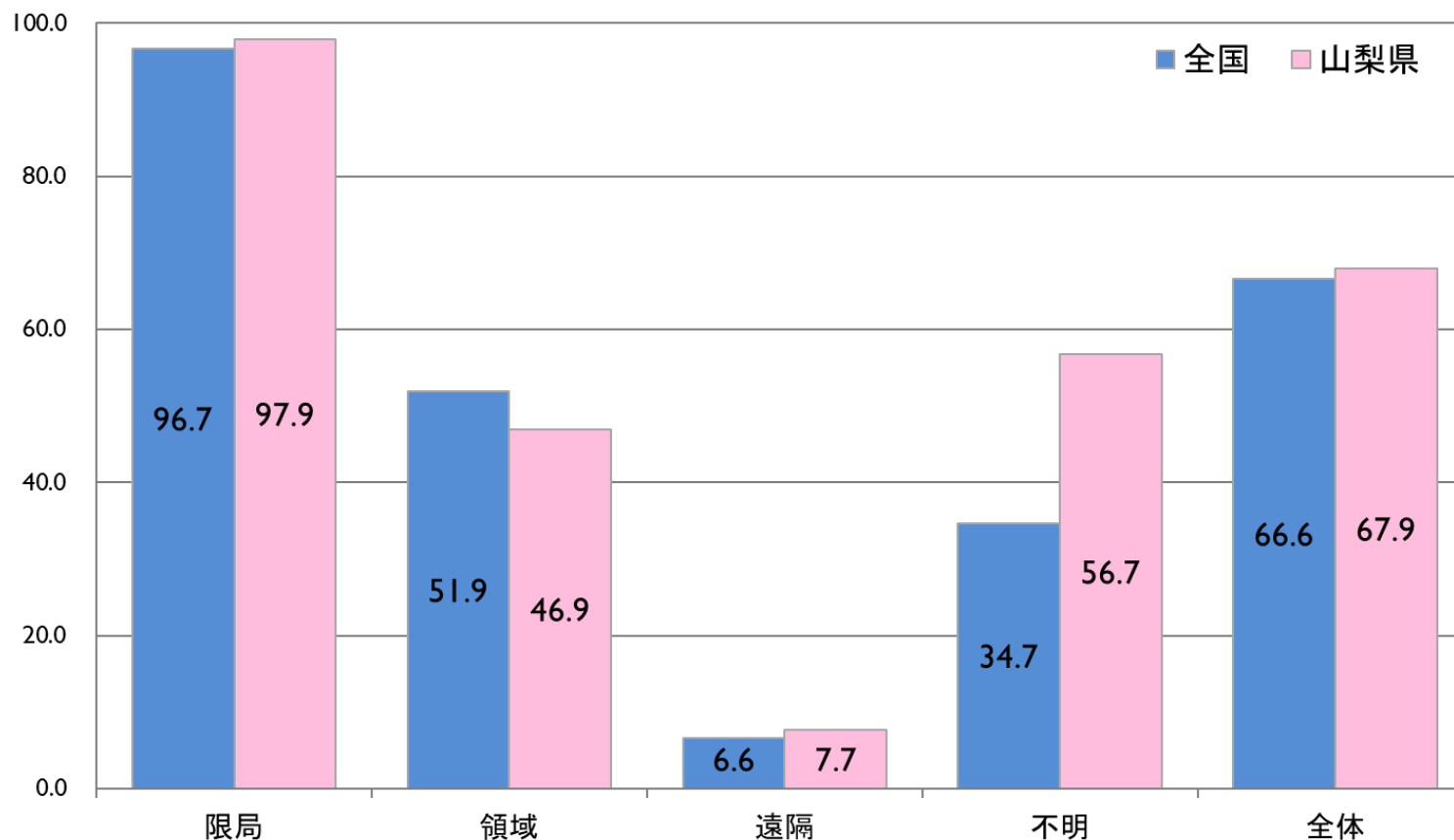
発見経緯検診・健診・ドッグの部位別進行度(2016～2020年)



胃がん

3. 5年相対生存率は、限局では97.9%であるが、領域では46.9%に半減しており、早期発見がより重要である。（参考資料1スライド43）

胃がん進行度別5年相対生存率(2009～2011年)(%)



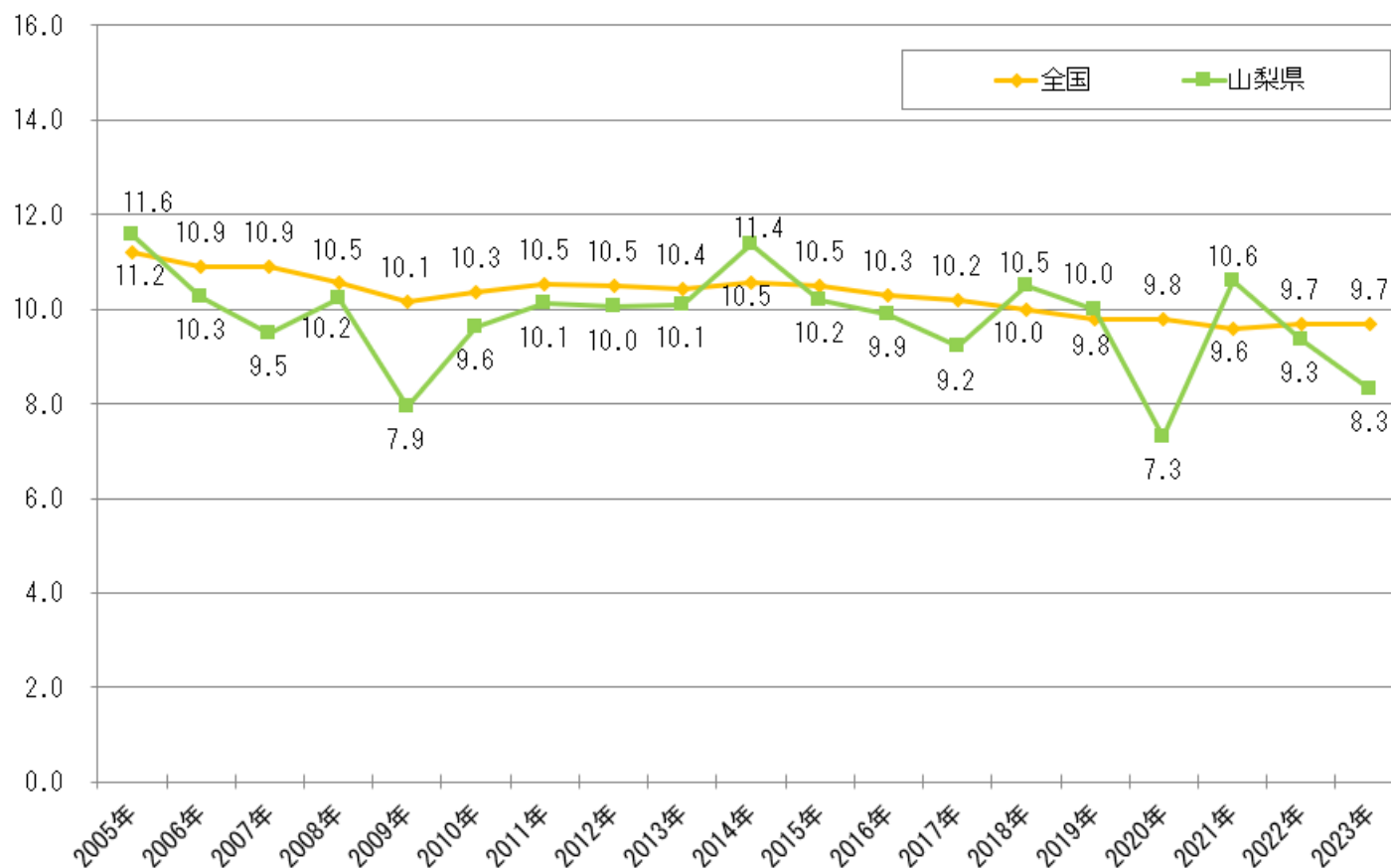
領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

出典：全国がん罹患モニタリング集計2009～2011年生存率報告

大腸がん

1. 75歳未満年齢調整死亡率は、長期的にみると横ばいで推移しており、2021年に大きく増加し全国を上回ったが、その後は減少傾向にある。（参考資料1スライド45）

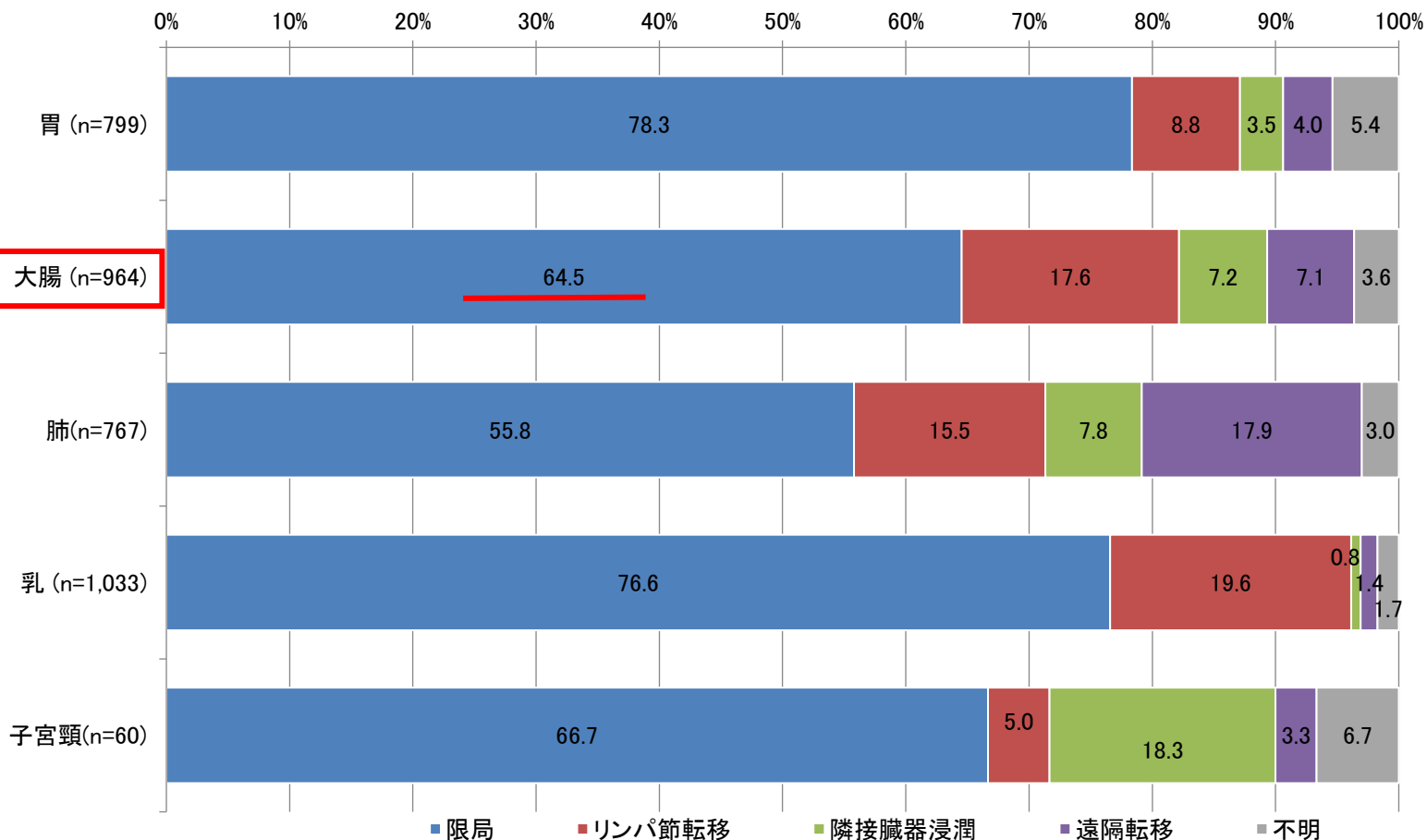
大腸がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



大腸がん

2. 発見経緯別の進行度(2016～2020)は、検診等で発見されたうち限局が64.5%で、胃がんや乳がんの80%近い値と比べて低い。(参考資料1スライド32, 42, 52, 71, 86)

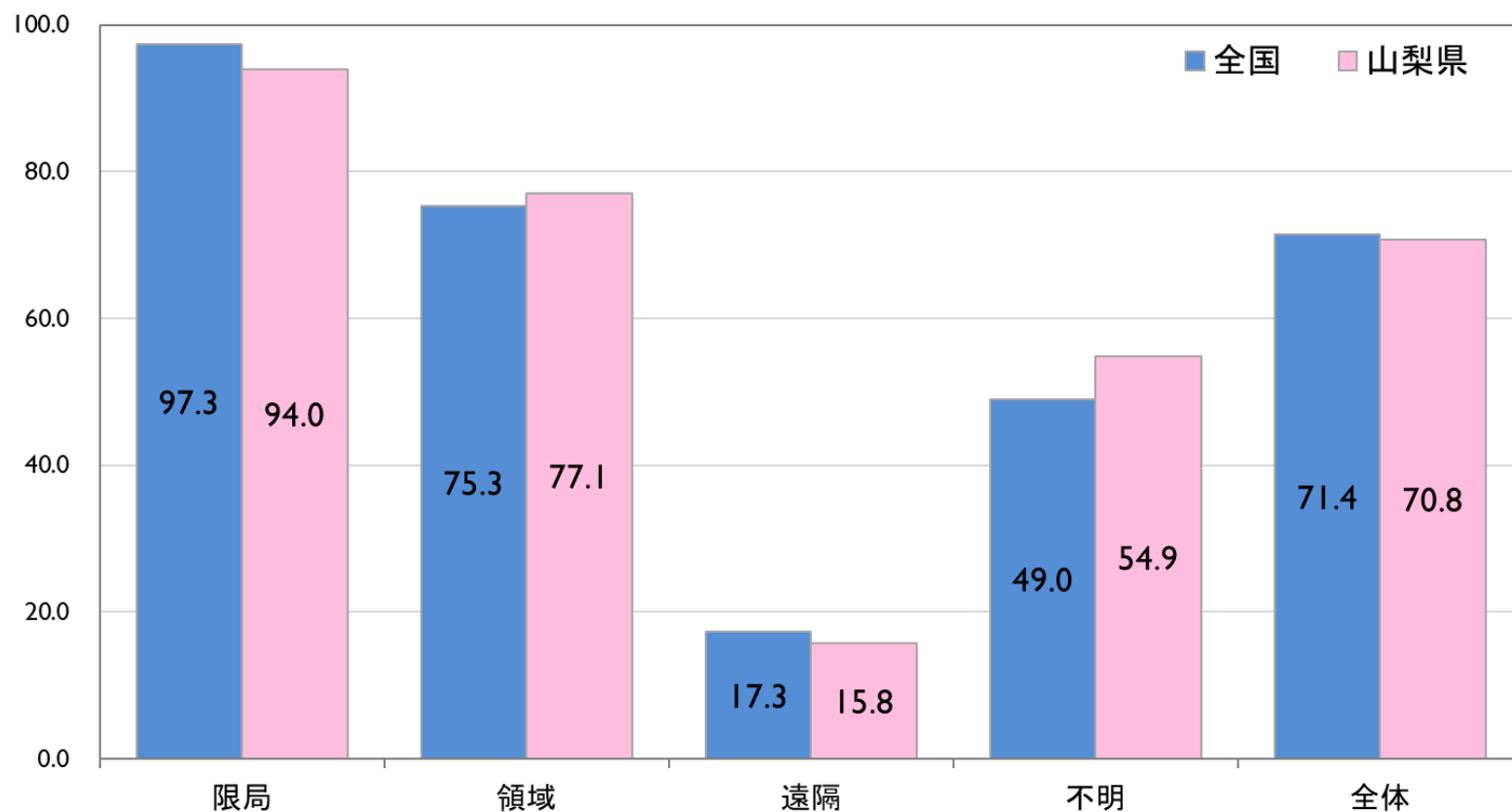
発見経緯検診・健診・ドッグの部位別進行度(2016～2020年)



大腸がん

3. 5年相対生存率は、限局では94.0%であるが、領域では77.1%に減少しており、早期発見が重要である。
(参考資料1スライド53)

大腸がん進行度別5年相対生存率(2009～2011年)(%)

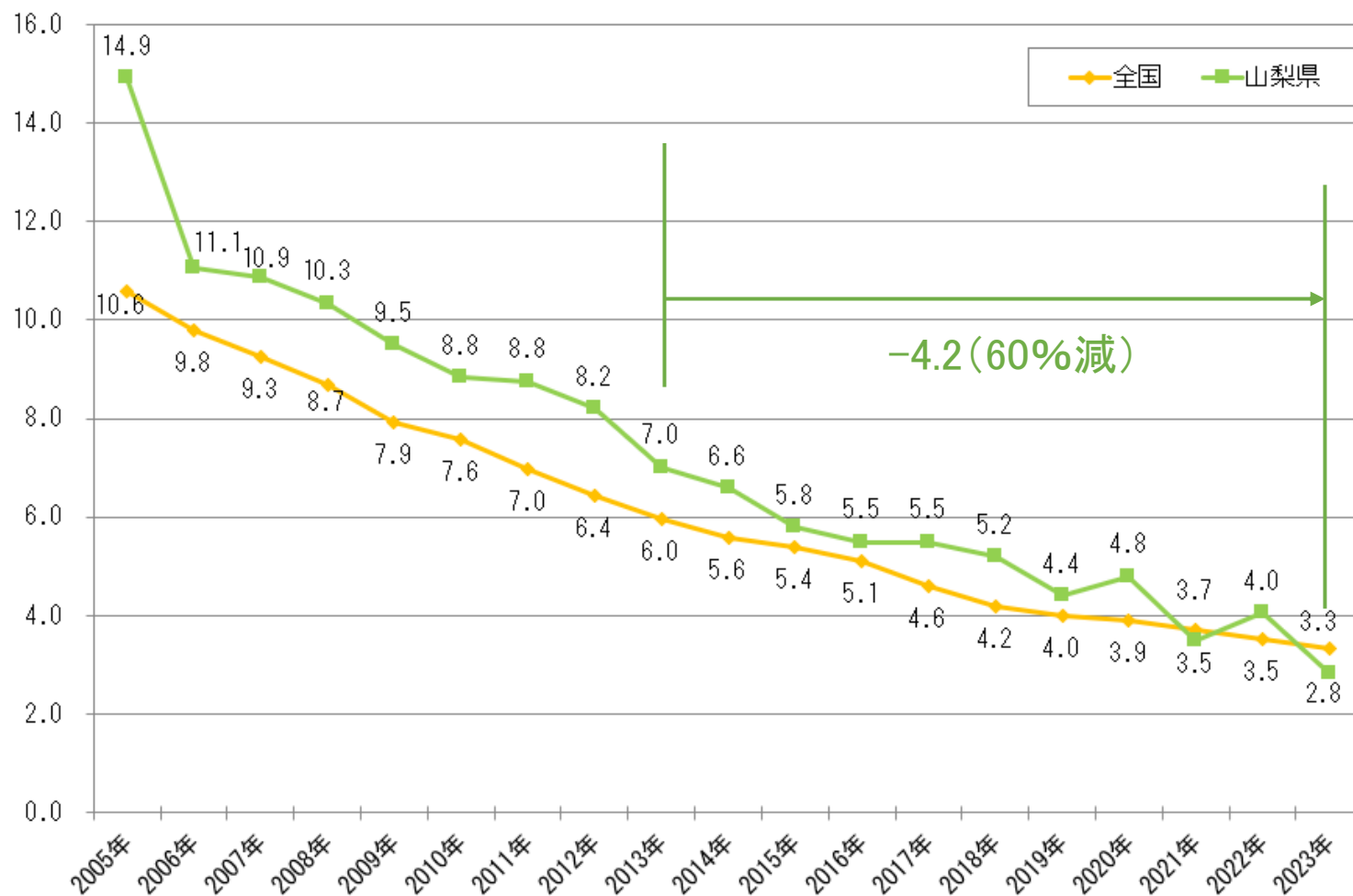


領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

肝がん

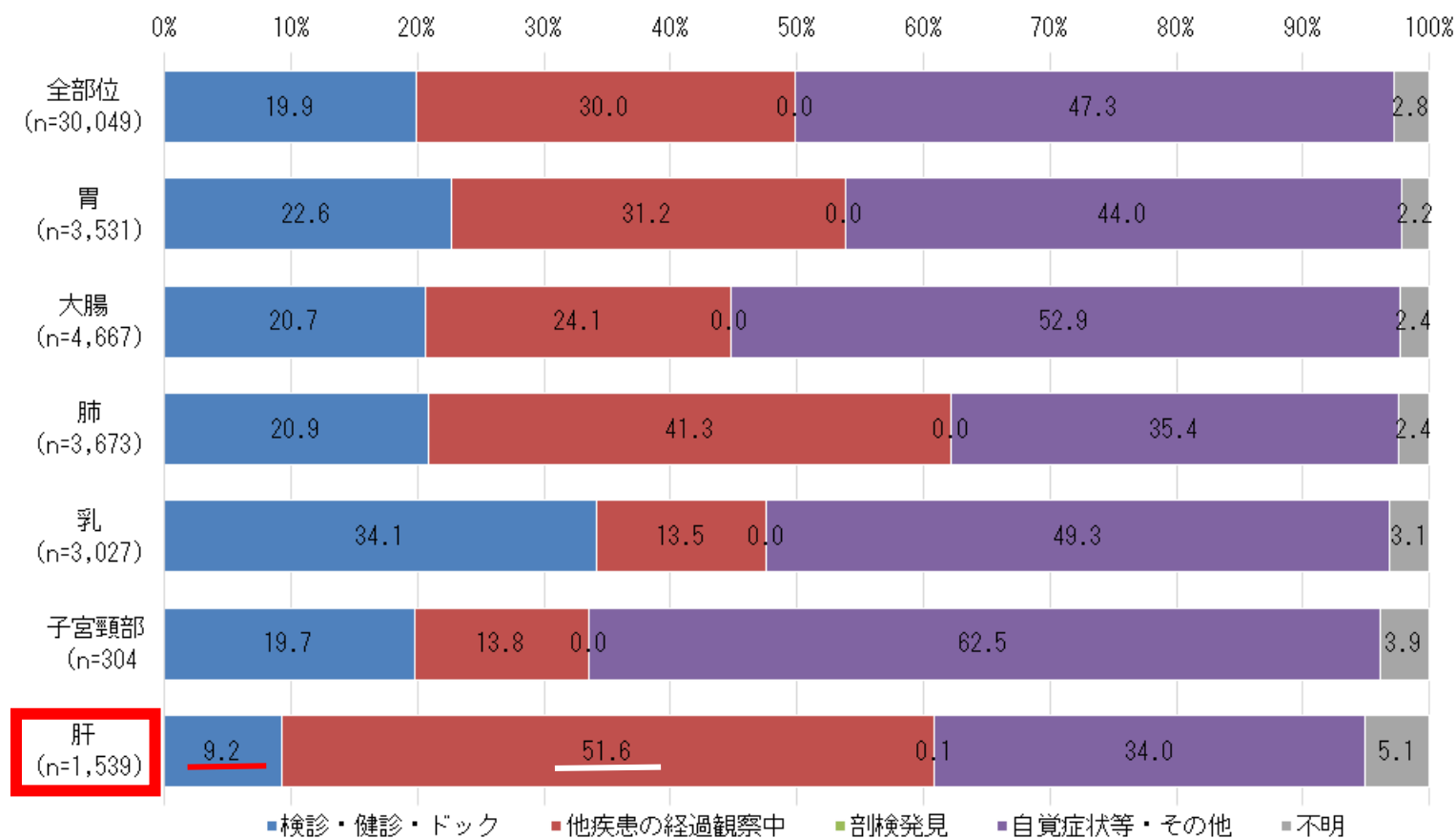
1. 75歳未満年齢調整死亡率は、10年前に比べ約60%減少し、2021年に初めて全国を下回った。
(参考資料1スライド55)

肝がん75歳未満年齢調整死亡率（人口10万対）



2. 発見経緯(2016～2020)は、他疾患の経過観察中が51.6%で、対策型検診を行う5がんに比べて最も高く、検診等は9.2%で最も低い。(参考資料1スライド16)

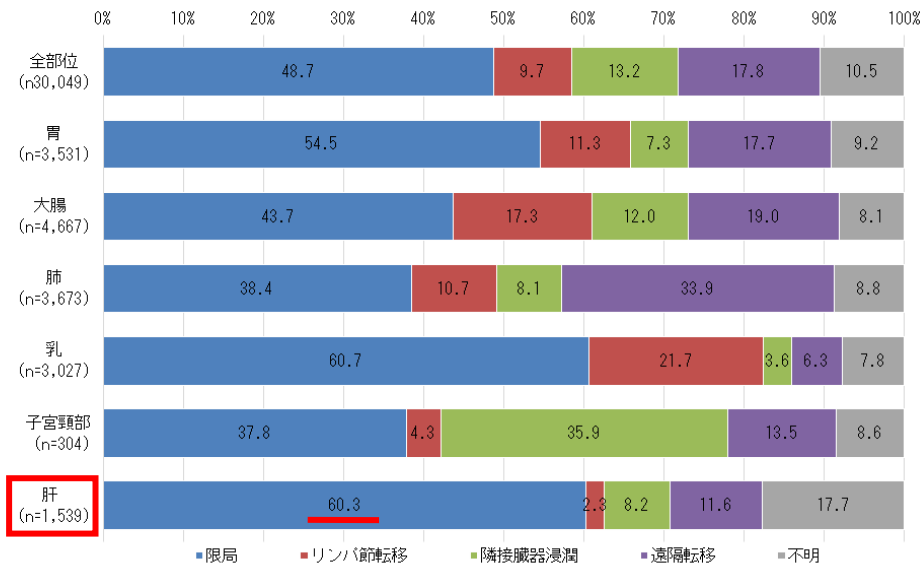
部位別の発見経緯 (2016～2020年)



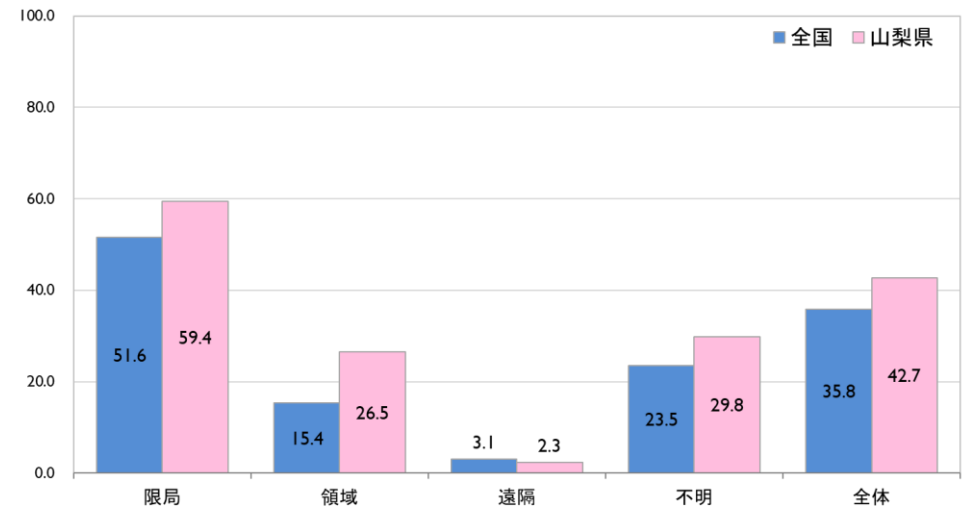
肝がん

3. 胃がんや大腸がん比べ、進行度(2016~2020)は限局が60.3%で高いが、5年相対生存率は限局であっても59.4%と低い。(参考資料1スライド17、63)

部位別の進行度 (2016~2020年)



肝がん進行度別5年相対生存率(2009~2011年)(%)



領域：リンパ節転移 + 隣接臓器浸潤

出典：全国がん罹患モニタリング集計2009~2011年生存率報告